

(様式2)

令和5年度吉田・飯塚・長瀬基金調査研究事業実績報告書

報告日 令和6年4月2日

社会福祉法人 北海道社会福祉協議会
会 長 長 瀬 清 様

下記のとおり報告します。

(フリガナ) 団体名又は 代表者氏名	ヨリツタ イマホウジンサヒカワリツタ イマホケンフクシカク 公立大学法人旭川市立大学保健福祉学部 コミュニティ福祉学科		
住 所			
電話番号		ファックス	
調査研究課題	これからの断酒会や自助グループに通所しているアルコール依存症の人々における支援のあり方		
実施期間	令和 5 年 6 月 1 日 ～ 令和 6 年 3 月 3 1 日		
研 究 員	氏 名	所 属	
	代表者 木下 一雄 研究員 五所 卓子	公立大学法人 旭川市立大学 公立大学法人 旭川市立大学	
目 的	今回の研究調査の目的としては、同じ境遇にある人々が安心して、アルコール依存症の人々の相談支援や悩み相談を受け止めていくことができるためには、どのような地域の方が必要なのかを当事者やその支援者に対して、デイケアや自助グループとは違った第3の場の創出により、北海道内の他地域に同じようなコミュニティスペース（居場所）を作り出すための流れを促進していく効果をもたらしていく。 その結果として、アルコール依存症の人々の社会復帰を定着させていくことに寄与できると考えている。		

記載上の留意事項

- 1 「目的」、「実施方法」、「結果の概要」は、各々300字程度にまとめて記述する。
- 2 その他参考事項については、今後、更に継続して研究が必要な場合に記載する。

実 施 方 法	実施方法としては、令和 5 年 9 月～令和 6 年 2 月の期間において旭川市周辺に在住しているアルコール依存症でコミュニティスペース利用者や支援機関等（医療機関や支援施設）に対してアンケート調査を月単位で実施し、利用者の孤独感や自己肯定感の回復に対する効果測定をしていく。具体的にどの関りや支援、活動が効果的であるのかを分析し明らかにしていく。
結果の概要	専門的医療機関や自助グループなどの支援機関につながったり、情報提供がされるアルコール依存症の人々はごく一部で、まだまだ多くの地域には援助を必要としている人が存在している。今回のアンケート調査で把握しきれていない潜在的依存症者へのアプローチもますます検討していくことが見えてきた。今後は、調査研究から導き出した結果をさらに精査し、専門的医療機関や自助グループではなく、なぜ第 3 の居場所なのかといった具体的な検証が必要である。
効 果	従来のアルコール依存症の治療において、8 割近くの人々が未治療のまま社会生活を送り、家族や周囲に問題を起こしたり、自身が自己の人生の意義を見失い、行きづらさを抱えていくことになり、結果孤独から逃れるためにアルコールに手を出してしまう。 そのような悪しきスパイラルに陥ってしまうと、自分自身でその悪しきスパイラルから逃れることは困難になってしまう。アルコール依存症は、「否認の病」と言われ、自分自身の疫病性を否定することにつながり、その結果医療機関や自助グループなどの専門機関への受信を拒絶し、未治療のまま症状が悪化してしまっている。まずは、誰かとつながり、孤立や生きづらさを共有できる場所を作り出すことが重要であり、今回のアンケート調査によって、その現状を顕在化することができたと考える。
そ の 他 参 考 事 項	従来の医療機関や自助グループといった定型型の支援だけでは対応に限界があり、適切につながらなければ結果として放置されてしまうことにもなるのである。そのためには、実際にアルコール依存症者からのインタビュー調査や第 3 の居場所の設置を検討し、そこで試行的作業を試みていくことにより、アンケート結果の裏付けを取っていく必要がある。